

## 八戸藩南部家墓所について（二・完）

藤田俊雄

### 第三章 勝林山金地禅林の南部家墓所

金地禅林が江戸城内の楓山から現在地に移転したのは、元和二年（一六一六）である。開山の金地院崇伝以来、徳川家とは深いつながりを持ち、将軍家の祈願寺であったという。<sup>91</sup> こうした関係からか境内には、八戸南部家以外にも盛岡南部家などの大名墓がみられる。金地禅林が、いつ頃から南部家と師壇関係にあったのかは明らかではない。

小井田幸哉氏によれば、金地院崇伝の日記『本光国師日記』の寛永九年（一六三二）の条に、南部利康（盛岡藩初代藩主利直の四男）の一周忌に際して、利直の依頼により利康及び南部一族に院殿号を付与した、との記載がみられるという。<sup>92</sup> このことから、寛永九年には金地院崇伝と、南部家の関係が発生していたことがわかる。

また、天保五年（一八三四）に刊行された『江戸名所図絵巻一』中、「勝林山金地院」の項には、「…閻魔王の石像は、塔中二玄庵の前にあり。宝永の頃、南部の領主、靈示に依ってかの地より麻布の別荘に遷され、再び威霊あるによって、又こゝに安ずといふ。<sup>93</sup>」と見え、金地禅林と

南部家との関係が推定される。この閻魔像は盛岡南部家の下屋敷（現、東京都港区南麻布五丁目・有栖川宮記念公園）にあったものが、金地禅林の子院、二玄庵の前に安置されたものである。<sup>94</sup>

盛岡南部家墓所は、八戸南部家墓所と石敷の通路を挟んで、東西に向き合う形で位置している。（図3）に両墓所の配置状況を、（表6）に盛岡南部家の埋葬者およびその生没年月日等を、各年代順に示した。建立されている墓のうち、光樹院（三代藩主重信側室）墓・清浄院（四代藩主行信正室）墓が共に、貞享元年（一六八四）と古い。この頃までには、金地禅林が江戸における盛岡南部家の菩提寺に定められていたことがわかる。

同年の貞享元年に建立されていながらも、清浄院墓と光樹院墓の形式の違いは、そのまま正室墓（五輪塔）と、側室墓（自然石）の違いとしてあらわれているようである。また、盛岡藩の場合、江戸で没した藩主も領国の菩提寺である東禅寺・聖寿寺（現、盛岡市北山）に埋葬されているが、正室等の場合は江戸で埋葬されたものと考えられる。ただし、清浄院（四代行信正室）・泰雲院（四代行信嫡子・隼人正実信）の墓は、金地禅林の他に、領国の聖寿寺にも並んで建立されている。

一方、八戸南部家墓所には、江戸で亡くなった藩主・正室・藩主の生母・側室・子女の墓がある。(表7)・(表8)に埋葬者およびその生没年月日等を、各年代順に示した。ただし、第二章の南宗寺の墓所で紹介したものについては、埋葬者の略伝等は省略する。

①天岸院殿江嶽宗靈大禪定門

天岸院(初代藩主直房次男)墓は、領国八戸の菩提寺・南宗寺にも建立されている。南宗寺の場合は、墓標が五輪塔であり、戒名が「天岸院殿江嶽宗靈大居士」となっている。

②天祥院殿前遠州大守月礪宗真大居士

③秋林院殿月窓妙皓大姉

秋林院は、三代藩主通信の正室である。加賀大聖寺の松平飛彈守利明の娘であり、宝永二年(一七〇五)九月に嫁入りしている。宝永三年(一七〇六)八月一日、江戸において没している。享年二十九才。<sup>(95)</sup>領内での七日間の鳴物停止が触れられている。<sup>(96)</sup>

④梅岑院殿香室慧薫大姉

仙は、二代藩主直政の長女として、延宝八年(一六八〇)に生まれた。母は直政の側室・さよである。朽木主水周綱の室となるが、後、離縁している。宝永七年(一七一〇)十月十七日、江戸において没している。享年三十一才。七日間の鳴物停止が触れられている。<sup>(97)</sup>

⑤靈松院殿法靈宗珠大姉

⑥正智院殿心光自照童女淑靈

勝は、三代藩主通信の三女として、宝永五年(一七〇八)江戸で生まれた。母は藩士荒木田武兵衛の娘・かよである。正徳五年(一七一五)

一月七日、江戸において没している。享年七才。家中・町在々の鳴物停止が触れられている。<sup>(98)</sup>

⑦操松院殿貞室妙清大姉

⑧空華院殿一峰宗寶禪定門

修理は、三代藩主通信の次男として、正徳二年(一七一二)江戸で生まれた。母は⑥の正智院と同じく、かよである。享保七年(一七二二)七月十二日、江戸において没している。享年十一才。七月二十二日より、家中・町在々の鳴物停止、作事・普請の停止が触れられている。<sup>(99)</sup>

⑨圓鏡院殿月觀宗瓊大姉

圓鏡院は、四代藩主廣信の正室である。松平紀伊守信庸の娘・秀であり、享保十二年(一七二七)一月に嫁入りしている。享保十四年(一七二九)九月二十二日、江戸において没している。

⑩正見院殿前甲州大守寛雲宗知大居士

⑪妙雲院殿光岩宗瑞大姉

妙雲院は、二代藩主直政の正室である。盛岡藩四代藩主・南部信濃守行信の四女・志久であり、元禄元年(一六八八)四月に嫁入りしている。寛保三年(一七四三)五月二日、江戸において没している。享年七十二才。当時の五代藩主信興は、公儀へ二十日の忌を届け出している。寛延二年(一七四九)・宝暦五年(一七五五)・寛政四年(一七九二)には七回忌・十三回忌・五十回忌が行われた。<sup>(100)</sup>

⑫莊嚴院殿玉峯宗明大姉

莊嚴院は、五代藩主信興の正室である。大和芝の織田肥前守輔世の娘であり、延享二年(一七四五)二月に嫁入りしている。延享四年(一七

四七) に信依(六代藩主・宝性院)、寛延二年(一七四九)に岩之進(青岑院)を江戸で出産している。岩之進出産の後、同年五月十九日、江戸において没している。享年二十一才。葬儀の様子を「八戸藩日記」では次のように記している。

「 六月六日 晴

一、奥様御尊骸去廿五日未ノ上刻御出棺、於金持院<sup>(マヤ)</sup>ニ御葬送無御滞相濟、暮頃迄ニ御人数引取候段申来<sup>(13)</sup>」

莊嚴院の遺骸は、五月二十五日に出棺し、金地禪院で葬儀が行われている。領国からも諸役の派遣が行われたようである。寺には、百ヶ日迄の供養料五十枚・米二十俵が囀る。

⑬恵観院殿香州智蓮大姉

恵観院は、五代藩主信興の後室である。盛岡の連枝・南部(七戸)外記愛信の娘・勢那である<sup>(14)</sup>。宝暦元年(一七五一)に清(後、貞)を、年代は不明であるが亨を出産している。宝暦十年(一七六〇)六月八日、江戸において没している。

⑭青岑院殿幽玄宗岩童子

岩之進は、五代藩主信興の五男として、寛延二年(一七四九)江戸で生まれた。母は正室・莊嚴院(No ⑫)である。宝暦十一年(一七六一)三月十四日、江戸において没している。享年十三才。

⑮瑞心院殿雪堂知光大姉

瑞心院は、六代藩主信依の側室・梅である。江戸青山の商家・松本屋源蔵の娘であり、明和二年(一七六五)に信房(七代藩主・仙溪院)、明和四年(一七六七)に依晴(松靈院)を出産している。後、土岐大和守

の家臣梅村兵助へ降嫁し、明和六年(一七六九)十月二十二日、梅村家において没している。品川東海寺に埋葬されたが、寛政七年(一七九五)の二十七回忌に際し、金地禪院へ改葬された。この際、石碑・位牌を造立し、法号は南部家先代生母の格に倣って「瑞心院殿雪堂知光大姉」と改めている。法要の資料として白銀三枚・八木三俵を金地禪院へ、また同院の役僧陽峯へ慰勞として別に金二百足が下されている。

⑯宝性院殿前甲州大守禅岩宗安大居士

⑰俊巖宗顯童子 寛政六<sup>甲寅</sup>年正月八日

現段階では系譜が不明である。

⑱信行院殿靜室宗貞大姉

信行院は、六代藩主信依の正室である。伊予吉田の伊達和泉守村賢の妹・慶であり、明和六年(一七六九)三月に嫁入りしている。天明元年(一七八一)六月七日、信依が没すると、同月二十二日に撤髪して信行院と称した。享和元年(一八〇一)十一月四日、江戸において没している。

⑲松靈院殿靜岩宗純大居士

依晴(後、右京)は、六代藩主信依の次男として、明和四年(一七六七)江戸で生まれた。母は瑞心院(No ⑮)である。享和元年(一八〇一)十一月二十四日、江戸において没している。享年三十五才。八戸において、十二月七日より同二十日迄の鳴物停止が触れられている。

⑳量壽院織瀬方

量壽院は、六代藩主信依の側室・織瀬である。鈴木幸右衛門の娘であり、明和五年(一七六八)に主計(清源院)・明和七年(一七七〇)に光・

安永七年（一七七八）に信眞（八代藩主・惇徳院）をそれぞれ出産している。文政九年（一八一二）六月十三日、江戸において没している。藩主信眞・世子信經より公儀へ服喪届出が提出されている。

「八戸藩勘定所日記」には、鳴物停止緩和の沙汰が見られる。

「文政九年六月廿七日

一、此度鳴物御停止中ニ付、神社仏閣祭礼御留被置候所、村限之神酒備并虫祭風祭等之輕キ神事等者、御弛被仰出五御代官江申達、尤御守札、御湯立等之書上者差上不申様是又御沙汰<sup>(16)</sup>」

忌中のため鳴物停止が行われているが、虫祭・風祭などの神事を行う祭は緩和する旨が申達されている。

<sup>[21]</sup>秋蕙院殿端室宗正大姉

秋蕙院は、八代藩主信眞の正室である。相模小田原の大久保加賀守忠直の妹・園<sup>(16)</sup>であり、享和二年（一八〇二）六月に嫁入りしている。文化十二年（一八一五）九月三日、江戸において没している。

<sup>[22]</sup>天啓院殿心巖宗徹大居士

忠文は、八代藩主信眞の三男として、寛政十二年（一八〇〇）江戸で生まれた。母は側室・琴である。文化十四年（一八一七）四月十一日、幕臣大久保彌三郎の贅養子となる。同月二十四日に、江戸において没している。享年十八才。八戸において三日間の鳴物停止が触れられている。

<sup>[23]</sup>妙相院殿快巖宗喜童子

巖は、八代藩主信眞の九男として、文政二年（一八一九）江戸で生まれた。母は側室・作である。文政四年（一八二二）十月十四日、江戸において没している。享年二才。

<sup>[24]</sup>信受院殿松巖妙探大姉

重は、八代藩主信眞の四女として、文化六年（一八〇九）江戸で生まれた。母は側室・琴である。文政七年（一八二四）四月二十九日<sup>(17)</sup>、江戸において没している。墓碑には五月二十一日とみえる。享年十五才。

<sup>[25]</sup>慶相院殿應巖自欣童子

満彌は、八代藩主信眞の十男として、文政八年（一八二五）江戸で生まれた。母は側室・作である。同年五月十九日、江戸において没している。墓碑には五月二十九日とみえる。享年一才。

<sup>[26]</sup>瑤蕙院殿芳淑幻秀童女

鋪は、八代藩主信眞の世子・信經（簫成院）の長女として、天保三年（一八三二）江戸で生まれた。母は信經正室・壽（松平丹波守光年妹、齡操院）である。翌年の七月二十二日、江戸において没している。享年一才。

<sup>[27]</sup>簫成院殿韶巖宗儀大居士

<sup>[28]</sup>碧窓院殿浄影宗鏡童女

現段階では系譜が不明である。

<sup>[29]</sup>仙溪院殿伊勢大守仁道宗壽大居士

<sup>[30]</sup>梅林院殿檀岸海大居士

<sup>[31]</sup>寶體院殿金室宗剛大姉

寶體院は、七代藩主信房の正室である。越後新発田の溝口主膳正直女・よしである。天明元年（一七八一）八月、婚約。天保六年（一八三五）五月十二日、信房が没すると、六月十二日には撮髪し、寶體院と称した。天保九年（一八三八）六月十日、江戸において没している。

〔32〕靈池院殿清蓮智香重女

千代は、八代藩主信眞の九女として、天保十年（一八三九）江戸で生まれた。母は側室・菊である。翌、十一年六月五日、江戸において没している。

〔33〕惇徳院殿前左金吾校尉仁峯宗榮大居士

〔34〕齡操院殿泰室宗禎大姉

齡操院は、八代藩主信眞の世子・信經（簫成院）の正室である。松平丹波守光年妹・壽であり、文化十三年（一八一六）八月、婚約している。同年十二月に利と更称する。翌、十四年十二月に嫁入りしている。天保三年（一八三二）、鋪（〔26〕瑤蕙院）を江戸で出産している。翌、天保四年十月十六日に信經が没すると、同十八日に薙髪し、齡操院と称した。文久二年（一八六二）一月二十日、江戸において没している。享年六十一才。

〔35〕常行院殿寂空妙照大姉

以上、金地禪院に埋葬された八戸南部家の人々の略伝等を見て来た。確認できた三十五基の内訳は、藩主墓五基（〔2〕・〔10〕・〔16〕・〔29〕・〔33〕）、正室墓十基（〔3〕・〔5〕・〔9〕・〔11〕・〔13〕・〔18〕・〔21〕・〔31〕・〔35〕）、藩主の生母墓二基（〔15〕・〔20〕）、世子墓二基（〔27〕・〔30〕）、世子正室墓一基（〔34〕）、子女墓十五基（〔1〕・〔4〕・〔6〕・〔8〕・〔14〕・〔17〕・〔19〕・〔22〕・〔26〕・〔28〕・〔32〕）である。正室墓は、二基（初代靈松院・九代常行院）南宗寺にも建立されているが、金地禪院にはすべての正室墓が建立されている。これは、参勤交代制の導入により、世子と共に正室は江戸藩邸での生活が常であったためと言えよう。

## 第四章 高野山に建立された墓碑

この章では、領国八戸の南宗寺と、江戸の金地禪林以外の八戸南部家墓所として、高野山奥之院に建立された墓について紹介する。建立された八戸南部家の墓を紹介する上で、高野山について述べた後、南部家と師檀関係のある子院の遍照光院について見て行きたい。

### （一）高野山と奥之院

高野山は和歌山県伊都郡高野町に所在している。弘仁七年（八一六）、空海が真言宗の根本道場として創建した金剛峯寺の別称として知られている。固有の山名としてはなく陣ヶ峰・楊柳山・摩尼山・弁天岳など標高一、〇〇〇メートル前後の山々とそれに囲まれた盆地状の平坦地を含んだ総称で、平坦地は標高八〇〇メートルほど、東西六キロメートル・南北三キロメートルの広がりをもつ。寺名としての高野山は、壇上伽藍・十谷・奥の院の三部分に大別され、総本山金剛峯寺以下一二〇ほどの子院や堂塔を擁する一大法域を形成する。

延喜二十一年（九二一）、空海に「弘法大師」の諡号を賜わった。この時、醍醐天皇は夢告をうけ、弘法大師に衣を贈り、奥之院大師御廟で観賢（東寺長者、高野山金剛峯寺座主兼務）に着せ替えさせた。以来、お衣替えの行事が続き、空海が奥之院で生きて人びとを救っている、という入定信仰が広まっていった。「入定」とは入滅や入寂ではなく、生きたまま永遠の禪定（仏教の瞑想）に入ることである。この入定をはたした

空海との結縁を願って、人々は昔から納骨と供養のために奥之院へ参つたのである。

こうした奥之院への納骨の慣習は、高野聖などの活躍によって、中世の頃から盛んになってきたといわれ、数世紀にわたってまつられてきた墓塔・墓石群は、その数二十万基ともいわれている。まさに日本最大の霊域である。墓は、はじめは木製の卒塔婆が主として建てられたが、これが石造にかわっている<sup>(10)</sup>。

高野山への納骨信仰は、江戸時代に入って、徳川將軍家が家康の霊廟を高野山に築き、祖先崇拜の風習を強く押し進めたため、諸大名の間にさらに広まった。このように諸大名が盛んに墓石を建てた裏には、幕府が、特に外様大名に対してとった、蓄財消費のための政策が秘められている、ともいわれる。

奥之院一の橋から中の橋までの間には、曾我兄弟墓、佐竹義重霊屋、上杉謙信・景勝霊屋、井伊直弼廟、熊谷直実・平敦盛墓、伊達政宗墓、紀伊徳川家の祖頼宣墓、武田信玄・勝頼墓、徳川吉宗墓、薩摩藩主島津家墓（四番碑）、石田三成墓、明智光秀墓などがある。

中の橋から御廟橋までの間には、慶長四年（一五九九）に薩摩藩主島津義弘・忠恒父子が建てた朝鮮陣敵味方碑、奥之院の墓石中で最も大きく一番碑と呼ばれる徳川秀忠夫人・崇源院墓、千姫墓、慶長十二年（一六〇七）建立の松平秀康および同母霊屋、豊臣家墓所、織田信長墓、筒井順慶墓、浅野内匠頭と赤穂四十七士の墓、安芸浅野家墓（二番碑）、京極高次の大津籠城碑、加賀前田家墓（三番碑）などがある。

御廟橋を渡ると、霊元天皇く孝明天皇までの九代の天皇とその皇族の

爪や歯を納めた宝塔が並ぶ仙陵や、春日局・佐久間將監墓などがある<sup>(11)</sup>。

## （二）高野山遍照光院

高野山では、子院がいくつが集まっている地域を谷と呼び、それらは地勢上もそうで、現在は西院谷・谷上院谷・南谷・本中院谷・小田原谷・一心院谷・五之室谷・千手院谷・往生院谷・蓮華谷の十谷に分かれる。これらの子院の多くは、鎌倉時代以後、大名や武将たちと密接な檀徒関係を結び、菩提所となって発展した。また、宿坊としても、今日に至るまで、高野山の経済的なささえとして栄えて来た。

これら十谷で構成される子院のうち、往生院谷にある遍照光院は、空海を開基とし、白河上皇の行幸の際に熊野別当湛増が堂宇を造営したと伝える。当院九世の覚敷は、文永年間、慈尊院から奥之院に至る町石（一町一約一〇メートルごとの距離を示す道標。）を木製から石造のものへ改めた。本尊は柿不動と呼ばれる不動明王である。江戸期の院領は三十五石で、末寺二十をもった<sup>(12)</sup>。

この遍照光院と檀徒関係を結んだ大名で盛岡・八戸南部家、九州小倉の小笠原家、対馬の宗家、会津の松平家などは特に檀契が深い<sup>(13)</sup>。遍照光院と南部家の関係を示す史料として最も古い記録は、現在、一括して国の重要文化財に指定されている『南部家文書』中の「遍照光院良尊書状」であろう。

今度於相州表、関白様

就御尊意、屋形様御同心被成、

御出仕之由、大慶存候條、則令

抽丹誠、愛染王供執行

申、御卷数令進入候、乍憚

萬事可然候條、可御心易候、

委曲東善寺可被申達候間、

不能多筆候、恐々謹言、

(付箋)

「天正十八年庚辰 遍照光院

七月十一日 良尊(花押)

八戸殿 御宿所

(包紙) 遍照光院

「八戸殿 御宿所 大学頭良尊」

原史料を解説された小井田幸哉氏は、この書状について以下のように紹介されている。「信直に随つて小田原参陣した八戸直栄が従軍僧東善寺を本山である高野山別格本山遍照光院に遣わして、武運長久家門繁栄を祈らせたのに対し、「御卷数」(祈禱のため読誦した経巻の名目、度数などを一紙に合わせ書きした目録。)に添えた遍照光院の院家(インゲ・住職)である大学頭良尊自筆の書状である。」<sup>(12)</sup>

これによれば、天正十八年(一五九〇)には根城南部家の祈願寺であった東善寺<sup>(13)</sup>を通じて、南部家と遍照光院との間に関係ができていたことがわかる。

南部家と遍照光院の檀徒関係を示す史料としては、八戸市立図書館所蔵(八戸南部家旧蔵文書)の「高野山遍照光院へのお墨付写」がある。

当写しは、盛岡南部家初代利直・二代重直・三代重信のお墨付の写しである。

○利直お墨付

従往古、南部領内不残壹人

高野山遍照光院舊檀無其隠、

今度当住寺為後代墨付被

致競望候之間指遣候、武運

長久家門繁栄之祈念可

被抽□□候

南部信濃守

利直

元和第九曆

○重直お墨付

後代之亀鏡任先觀□此支證

者也、以武運長久家門繁栄

応祈專可被抽之者也

南部山城守

寛永拾一年 重直

七月十六日

高野山遍照光院

○重信お墨付

南部領内望干和賀、稗貫、志和、

鹿角、野洲、田名部、高野山遍照光院

舊檀無其隠候間、侍、出家、町

人、百姓己下悉以可令参詣、我寺

志也、南部之家者從新羅三郎

并遠光繼其氏、數百年之牌檀

□□之筋目不淺候故以、右信濃守

利直被出墨印候、今亦弥為

高野山遍照光院舊檀無其隠

累代墨付□被競望任先觀

今亦為後代之支證指遣之

以武運長久家門繁栄之祈

念專可被抽丹誠者也

南部大膳大夫

寛文第五年 重信

四月八日

高野山

遍照光院

以上、三代のお墨付を紹介して来たが、三代とも共通しているのは、武運長久・家門繁栄を遍照光院に祈らせていることである。元和九年（一六二三）の利直お墨付以後、藩主の代替り毎に遍照光院に出されたものと考えられる。

この他、盛岡藩家老の執務日誌ともいうべき盛岡藩「雜書」中には、以下のような高野山遍照光院に関する記録が散見する。

明暦四年（一六五八）正月十九日条

「一、高野山遍照光院就代替、領分中在々所々札守挽（引）廻候出家衆上下四人、一夜寓は宿賄之訴訟候間仕出ニて宿可申付候、

逗留於有之ハ使僧手前ニて可為賄者也

明暦四<sub>戊戌</sub>年正月十九日

中山より南領分中

漆戸勘左衛門

桜庭兵助

毛馬内九左衛門<sup>(15)</sup>

寛文三年（一六六三）九月廿一日条

「一、高野山遍照光院使僧、領分中在々所々札守挽廻候出家上下四人、

一夜寓者宿賄之訴訟候間、仕出ニて宿可申付候、逗留於有之ハ、使

僧手前ニて可為賄者也

寛文三年九月廿日

毛馬内九左衛門

八戸弥六郎

奥郡領分中

一、高野山遍照光院使僧、領分中在々所々札守挽廻候出家上下四人、

一夜寓者宿賄之訴訟候之間、仕出ニて宿可申付候、逗留於有之ハ使

僧手前ニて可為賄者也

寛文三年九月廿日

毛馬内九左衛門

八戸弥六郎



中山より南領分中

一、高野山遍照光院より之使僧、領分中在々所々札守廻候、出家衆偕被遣伝馬三疋、無滞出可申候也

寛文三年九月廿日

毛馬内九左衛門

八戸弥六郎

盛岡より在々領分中

右三通之手形、今日長谷川又左衛門を以渡之<sup>(18)</sup>

高野山遍照光院の使僧が、御札・御守の引廻のため盛岡領内を通行の際の手形発行を、家老名で申達している。通行手形発行の申達は、寛文十年（一六七〇）十二月十五日条にも見える。

高野山奥之院参道の一の橋を渡り、やや行つた左手奥に「陸中南部家墓所」の標柱がある。ここには盛岡藩南部家の墓所があり、初代利直夫妻・二代重直・三代重信などの五輪塔がある。利直五輪塔は、高さ五メートル余で、銘文に「(表) 利直 寛永十年八月十八日 一週忌 (裏) 石屋大坂甚左エ門 奉行蛇口次郎・高谷宗左エ門 御宿坊孫遍照光院阿闍梨良恵」とあるという。<sup>(19)</sup> 利直は、寛永九年（一六三二）八月十八日に江戸桜田邸で没し、はじめ正寿寺（現、青森県三戸郡南部町）に埋葬され、元禄十一年（一六九八）に盛岡の東禅寺に改葬されている。法名は南宗院殿四品前信州大守月溪晴公大居士である。

二代重直は、寛文四年（一六六四）九月十二日、江戸桜田邸で没し、盛岡の聖寿寺に埋葬された。法号は即性院殿前城州大守三峯宗玄大居士である。重直墓が高野山に建立される前の記事が、盛岡藩「雑書」中に

見える。

寛文五年（一六六五）七月廿二日条

「一、即性院様御石塔於高野山立仕廻候由にて、野田金太夫・生方次郎兵衛今日下着、御前へ被召出御鷹野雲雀十宛被下候<sup>(20)</sup>」

このことから、高野山に石塔を建立するにあたって、家臣が派遣され、墓所等の見分が行われたものと思われる。建立月日は、利直の前例に倣って、一周忌に合わせたものであろうか。

以上、これまで断片的ながら、根城南部家・盛岡南部家の史料から、高野山遍照光院と南部家の関係について見て来た。以下、八戸南部家と遍照光院との関係について、「八戸藩日記」等から引用・紹介する。

寛文十一年（一六七二）三月朔日条

「一、高野山遍照光院より使僧昨夕下着之由、波々伯部二郎兵衛披露、則在々廻候御証文并伝馬三疋被仰付」

同年三月廿三日条

「一、高野山遍照光院之使僧ニ、御領分中初尾金取替被遣<sup>(21)</sup>」

延宝五年（一六七七）十一月十四日条

「一、高野山遍照光院より之使僧、御領分中札廻候付、御伝馬三疋偕被遣、是より先五戸へ参候<sup>(22)</sup>」

高野山遍照光院の使僧が来八して、領内勧化を願い出したので、勧化廻村の證文・伝馬を下付し、藩主より初尾金が付されている。

『八戸藩史料』中には、二代直政の高野山遍照光院へのお墨付の記事が見られる。

元禄七年（一六九四）十月

「高野山遍照光院の出願に付、同月同日左の親書を與へらる

南部八戸領至士庶人悉高野山遍照光院之舊檀無其隱候、今度墨付競望有之間證文如斯候、愈武運長久家門繁榮之懇祈可被抽丹誠者也

元禄七年十月十九日 南部遠江守

直政

高野山遍照光院

爾來例となりて藩主の代替り毎に墨付を與へ石碑等も建てられたり<sup>(11)</sup>

お墨付の書式は、先に紹介した盛岡南部家三代のものに倣った形を取っている。「爾來例となりて」とあるので、八戸藩主では二代直政のお墨付が最初であつたのかもしれない。これが恒例となり、藩主の代替り毎にお墨付が出されるようになり、石碑等も建てられたという。

石碑について記した史料としては、先に紹介した石橋弘氏所蔵の「御家譜拔書」がある。

高野山御石碑

清涼院様 仙壽院様

天祥院様 靈松院様

委細別紙二有之

以上のように、記されたものである。「委細別紙二有之」とみえ、別にその委細を書いたものがあつたのであろうが、現段階では確認していない。この抜書によれば、高野山には清涼院（初代藩主直房）・仙壽院（初代藩主生母）・天祥院（二代藩主直政）・靈松院（二代藩主直政正室）の四人の石碑が建立されていることがわかる。このうち、天祥院の石塔が

元禄十四年（一七〇一）に建立される過程を示す史料が、「八戸藩日記」に見られる。

「 四月三日 晴

一、摂待久左衛門兼而願上候ハ、高野ニて天祥院様御石塔御建被成候付、御骨之御供仕度旨願之通被仰付、理運一所罷立候様ニと被仰渡候

四月十二日 晴

一、理運并摂待久左衛門、高野御石塔御用ニ為御登被成候処ニ、江戸迄日沢弥左衛門、組詰番之者老人附為御登被成候

四月十四日 晴

一、今日、成田作左衛門、荒谷勝之助、理運、摂待久左衛門、御足輕式人罷立候<sup>(12)</sup>

「御骨之御供」と見えるが、高野山への納骨は、骨に限らず「頼慶縁起」に「先亡ノ齒、骨、髪」を納めるとあり、「齒、髪」も含まれており、これらを一括して「納骨」と考えた方が良さそうである。また、「山中他界」（死者の魂は、靈山に集まるといふ信仰）の民俗信仰の中に、興味深い事例がある。

高野山付近には、「骨のぼせ」という習俗があるという。『名利歳時記 高野山物語』からその事例を紹介すると、以下のようである。「高野山にごく近い村人は、例えば、花園村（和歌山県伊都郡）では、葬式の翌日、葬家の縁側で、生前親しかった人々の別れのお茶湯をうけ、近親の人々につれられて、高野山へ登ってくる。この地方はまだ土葬なので、一方の鬢の髪は、菩提寺にある参り墓（両墓制なので、死体を埋める三味墓

とは別の石塔を建て魂を供養する墓」に、一方は高野山に納められる。近親の人が（女人禁制の時代は男だけ）数人、髪をお骨といひ（以下、線筆者）、紙に包み、首にかけて行く。何故か、お骨を持った人は、傘をさす。恐らく死者の魂が飛散するのを防ぐ意味であろう。……お骨は、奥の院の納骨堂（近ごろは縁のある院に納める例もある）に納め……と、あり、ここでは遺髪を「お骨」と呼んでいることがわかる。

中川成夫氏等の手で調査が行われた高野山遍照尊院の旧弘前藩主津輕家墓所でも、遺骨はなく、遺髪が検出されている。この調査は、石塔修復を目的とした調査であるが、奥之院における近世大名供養墓の調査としては初例であり、貴重な報告となった。この調査では、初代為信より十一代までの五輪塔十三基、位牌型石塔三基、空髪（納髪）塔一基、石仏一基、一石五輪塔十四基が確認されている。興味深いのは、五輪塔・石塔には「追善供養塔」と、「逆修（生前に、自分のために仏事を修して、死後の冥福を祈る。）供養塔」があり、前者の建立年代には一回忌・三回忌・二十一回忌・二十七回忌・三十三回忌の建立が認められるという。<sup>(13)</sup>さて、最後に遍照光院が八戸南部家の永代供養を行っていたことを示す記事を『八戸藩史料』から引用・紹介する。

「天保六年十一月十七日

高野山遍照光院へ仙溪公の日牌祠堂料金五十両を囑す<sup>(14)</sup>

仙溪公とは、七代藩主信房（法号仙溪院殿前勢州太守仁道宗壽大居士）であり、天保六年（一八三五）五月十二日、江戸において没している。その位牌建立と永代供養料として、金五十両が遍照光院へ与えられている。

「天保十一年六月三日

寶體院の日牌祠堂金三十両を高野山遍照光院へ囑す<sup>(15)</sup>

寶體院とは、七代藩主信房の正室よし（法号寶體院殿金室宗剛大姉）であり、天保九年（一八三八）六月十日、江戸において没している。その位牌建立と永代供養料として、金三十両が遍照光院へ与えられている。八戸市立図書館所蔵（八戸南部家旧蔵文書）の「御請書」は、量壽院（八代藩主信眞の生母・織瀬）の位牌建立と永代供養料として金二十両を受領したことの覚書である。

覚

一金子貳拾両也

右者

量壽院殿御追福

永代大日牌御祠堂

金槌致寺納候以上

高野山

遍照光院役僧

文政九<sup>戊戌</sup>年八月

地寶院<sup>(印)</sup>

南部左工門尉様之内

中嶋武兵衛殿

（包紙）

「御請書」

当時の藩主は、従五位下左衛門尉に叙任している八代信眞であり、生母である量壽院（文政九年六月十三日没）のために永代供養を命じたものであろう。

同じく、八戸市立図書館所蔵（八戸南部家旧蔵文書）の「御法支請定」は、齡操院（八代藩主信眞の世子・信經正室）の法事の請定である。

泰為

齡操院泰室宗禎大姉御追福

理趣中曲三昧職衆請定

御導師 遍照光院

定光院 一乗院 奉

西室院 平等院 奉

高室院 三寶院 奉

高祖院 大乘院 奉

多聞院 隨心院 奉

北室院 地藏院 奉

寂靜院 普門院 奉

普賢院 奉

右来二十七日於遍照光院道場

可令参勤給之條如件

文久二年 戊辰年四月二十五日

遍照光院

知吏

齡操院の没日は、文久二年（一八六二）一月二十日であり、その三ヶ

月後に遍照光院の道場で法事が行われていることがわかる。遍照光院を導師として、同じ往生院谷にある三寶院・高祖院・北室院・地藏院の他、西院谷の平等院、小田原谷の高室院・大乘院、一乗院谷の西室院・多聞院・隨心院、千手院谷の一乗院・普門院・普賢院などの子院が参列している。定光寺・寂靜院は、明治の神仏分離の際、廃寺になったという。<sup>(註)</sup>

## おわりに

第一章では、大名墓の範となったと考えられる徳川將軍家の靈廟について紹介した後、大名家の靈屋・墓について触れ、その規格性・格差について論じた。

第二・三章では八戸南部家墓所に埋葬された人々の略伝と、その葬制の一端について紹介した。

第四章では、高野山遍照光院との関係について、盛岡南部家および八戸南部家の記録を基に紹介して来た。

本論のテーマである八戸南部家墓所のまとめをする。

第一に、八戸藩では廟堂といった形のは当初から建立せず、石塔を中心に、玉垣で囲んだ靈域をもつて、「御靈屋」あるいは「御玉屋」と尊称したものと考えられる。

第二に、八戸藩では葬儀等に際しては、表方・勝手方の代表諸役と、臨時的に任命される廟所普請奉行・葬儀方によって葬儀等が行われた。このことは、葬儀方を司る担当部局が設置されていたというよりは、藩をあげて対処したものと考えられる。また、藩主正室・生母等の

葬儀に際しては、奥に使える老女等の果す役割が大きかったと考えられる。

第三に、藩主が江戸で没した場合には、荼毘に付され、江戸の金地禅林と、在所の南宗寺に墓所が建立されている。この際、前者に遺骨、後者には分骨・遺髪・遺齒・愛用の品などの形で埋葬されたと考えられる。三味墓と、参り墓という「両墓制」の現れであろう。藩主以外の両寺院に墓所がある正室・世子等の場合も、同様と思われる。

第四に、高野山奥ノ院に建立された石塔は、基本的には供養塔であり、位牌建立と永代供養が、八戸南部家と檀徒関係のある遍照光院によつて取り行われている。

本論をまとめるにあたって、墓所の調査に際しては、南宗寺の田口豊實・金地禅林の松浦勝道両住職、仙台市在住の金津匡伸氏の御協力をいただいた。また、高野山遍照光院の酒井真典住職、前八戸市文化財審議委員長の小井田幸哉氏、前八戸市博物館館長の正部家種康氏、本会員で八戸西高校教諭の三浦忠司氏・黒石高校教諭の福井敏隆氏、八戸在住の石橋弘氏・江刺家均氏、岩手県立博物館の大矢邦宣氏・弘前市立博物館の武田智恵子氏からは貴重な御教示をいただきました。八戸市立図書館司書の中道敏夫氏・八戸市博物館学芸員の山田泰子氏からは資料解説に際して御協力をいただきました。

最後に、本会事務局の長谷川成一先生・小口雅史先生には、原稿提出の期限・枚数等で多大の御迷惑をおかけしました。特に御二方には厚く御礼を申し上げます。

## 註

(91) 前掲(6)

(92) 大矢邦宣「糠部の宗教文化―天台寺、西方寺毘沙門堂、供養塔を中心として―」(『岩手の歴史と風土 昭和五十九年度カルチャ・ユニバーシティ「歴史専門講座」講義録」一戸町教育委員会 一九八五所収)

(93) 鈴木棠三・朝倉治彦校注『江戸名所図会第一巻』角川書店 一九八九 二五六頁。

(94) 俵元昭『港区の歴史』名著出版 一九七九 二四三頁。

(95) 前掲(3)

以下、埋葬者の略伝は特に断らない限り、この資料による。

(96) 前掲(40) 六一〇頁。

(97) 前掲(45) 二八〇頁。

(98) 前掲(45) 五五二頁。

(99) 前掲(48) 二六三頁。

(100) 前掲(83) 四二二頁。

(101) 前掲(83) 五三六頁。

(102) 前掲(86) 三一〇・三一一頁。

(103) 前掲(83) 四二四頁。

(104) 石橋弘氏所蔵「御家譜抜書」

(105) 前掲(87) 四九九頁。

(106) 前掲(104) では、「大久保安芸守様御妹於里様」と見える。

(107) 前掲(3) 五四一頁では、没日を「五月一日」としているが、墓碑名から「四月二十九日」とする。

(108) 奥之院一の橋から中の橋の間に建つ「多田満仲墓」は、長徳三年(九九七)の刻銘がある五輪塔で、山内最古のものである。

(109) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典30 和歌山県』角川書店 一九八五、加藤楸邨・白洲正子・陳舜臣編『名剎歳時記 高野山物語』世界文化社 一九八九、景山春樹『比叡山と高野山』教育社 一九八六

(110) 前掲(109)のうち『角川日本地名大辞典30 和歌山県』

(111) 遍照光院の住職・酒井真典氏の御教示による。

(112) 小井田幸哉『八戸根城と南部家文書』八戸市 一九八六 三八七～三九〇頁。

(113) 「根城南部家」とは、根城跡(現、八戸市大字根城地内)を本拠としていた南部氏で、寛永四年(一六二七)に岩手県の遠野へ移封になり、藩政期に八戸を領した「八戸南部家」とは別系。

(114) 根城南部家の祈願寺であつた東善寺は、新義真言宗豊山派の総本山である長谷寺(現、奈良県桜井市大字初瀬)を本寺としていたが、真言宗開創の本山は高野山である。

(115) 盛岡市中央公民館『盛岡藩雜書第二巻』 一九八七 七五頁。

(116) 前掲(115) 三六六・三六七頁。

(117) 遍照光院の住職・酒井真典氏によれば、この一画は、大南部墓所と呼ぶという。

(118) 前掲(115) 四四四頁。

(119) 前掲(34) 二一〇頁。

(120) 前掲(34) 三一九頁。

(121) 前掲(3) 一〇九・一一〇頁。

(122) 前掲(40) 三〇〇・三〇三頁。

(123) 日野西眞定「高野山の納骨信仰―高野山信仰史における一課題―」(『高野山発掘調査報告書 奥之院・宝性院跡・東塔跡・大門』 一九八二)

(124) 中川成夫「高野山近世供養塔の調査―旧弘前藩主津輕家の例―」

(『考古学ジャーナル二八八』所収、ニューサイエンス社、一九八八)、中川成夫・岡本桂典編『和歌山県高野山遍照尊院 旧弘前藩主津輕家墓所石塔修復調査報告』 遍照尊院 一九八八

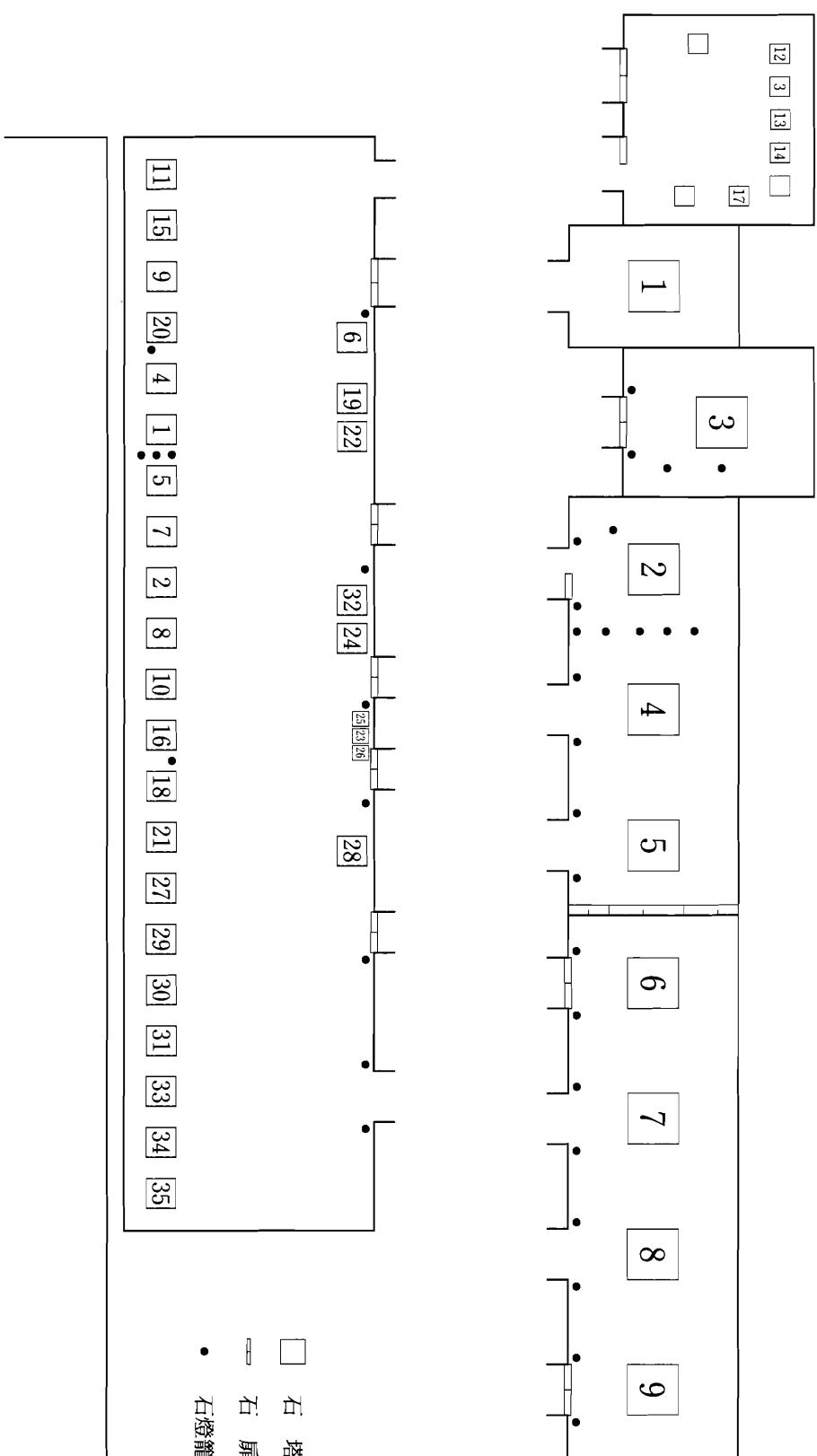
(125) 前掲(3) 五九五頁。

(126) 前掲(3) 六一〇頁。

(127) 遍照光院の住職・酒井真典氏の御教示による。

(八戸市博物館学芸員)

〔図 3〕



〔表6〕盛岡南部家墓所埋葬者一覧

墓No	墓形式	代	名前	戒名	生没年月日
1	自然石	3代側室	服部氏	光樹院殿寶室宗照大姉	？ ～貞享元年(1684) 7月6日
2	五輪塔	4代正室	毛利和泉守光廣娘・熊姫	清浄院殿玉岑宗秀大姉	？ ～貞享元年(1684) 10月17日
3	埴形墓標	4代世子	隼人正実信	泰雲院殿從五位下前布護靈嶽宗光大居士	？ ～元禄13年(1700) 12月29日
4	五輪塔	6代正室	蟬須賀飛彈守隆長娘・春姫	仙桂院殿祥雲宗寿大姉	？ ～享保11年(1726) 7月7日
5	五輪塔	7代正室	禰原式部大輔政邦娘	本性院殿明室宗文大姉	？ ～寛保3年(1743) 6月14日
6	五輪塔	9代正室	南部彦九郎信起娘・依姫	觀光院殿禪室宗證大姉	？ ～文政7年(1824) 2月12日
7	五輪塔	12代正室	松平右京大夫輝延娘・幸姫	宝鏡院殿湛然宗照大姉	？ ～文政12年(1829) 8月12日
8	五輪塔	？代正室	南部利周娘	法雲院殿實嚴宗際大姉	？ ～弘化4年(1847) 2月19日
9	五輪塔	10代正室	松平安芸守重晟娘	光樹院殿明雲宗智大姉	？ ～文久3年(1863) 1月28日

〔表7〕八戸南部家墓所埋葬一覧 (1)

墓No	墓形式	代	名前	戒名	生没年月日
1	自然石	初代次男	直常	天岸院殿江嶽宗雲大禪定門	？ ～延宝8年(1680) 6月22日
2	五輪塔	2代	直政	天祥院殿前遠州大守月禪宗真大居士	寛文元年(1661) 5月6日～元禄12年(1699) 3月16日
3	笠付丸柱	3代正室	松平飛彈守利明娘	秋林院殿月窓妙皓大姉	？ ～宝永3年(1706) 8月1日
4	笠付丸柱	2代長女	仙姫	梅岑院殿香室惠薫大姉	延宝8年(1680) 5月6日～宝永7年(1710) 10月17日
5	宝篋印塔	初代正室	川口源之丞娘	靈松院殿法靈宗珠大姉	？ ～正徳3年(1713) 5月念日
6	笠付丸柱	3代3女	勝姫	正智院殿心光自照童女淑靈	宝永5年(1708) 7月29日～正徳5年(1715) 1月7日
7	笠付丸柱	初代長女	富姫	操松院殿貞室宗清大姉	寛文9年(1669) 3月5日～享保3年(1718) 8月8日
8	笠付丸柱	3代次男	修理	空華院殿一峰宗寶禪定門	正徳2年(1712) 5月19日～享保7年(1722) 7月12日
9	笠付方柱	4代正室	松平紀伊守信庸娘・秀姫	圓鏡院殿月觀宗瓊大姉	？ ～享保14年(1729) 9月22日
10	五輪塔	4代	廣信	正見院殿前甲州大守寛雲宗知大居士	宝永3年(1706) 3月7日～寛保元年(1741) 5月2日
11	五輪塔	2代正室	南部信濃守行信娘・志久姫	妙雲院殿光岩宗瑞大姉	寛文12年(1672) 1月17日～寛保3年(1743) 5月2日



〔表8〕八戸南部家墓所埋葬一覽 (2)

墓No	墓形式	代	名前	戒名	生没年月日
12	笠付方柱	5代正室	織田肥前守輔世娘	莊嚴院殿玉峯宗明大姉	？ ～寛延2年(1749)5月19日
13	笠付丸柱	5代後室	南部外記愛信娘・勢那	恵観院殿香洲智蓮大姉	～宝暦10年(1760)6月8日
14	笠付丸柱	5代次男	岩之進	青岑院殿幽玄宗岩童子	寛延2年(1749)4月30日～宝暦11年(1761)3月14日
15	笠付方柱	7代生母	松本屋源蔵・梅	瑞心院殿雪堂智光大姉	～明和6年(1769)10月22日
16	五輪塔	6代	信依	宝性院殿前甲州大守禪岩宗安大居士	延享4年(1749)2月11日～天明元年(1781)6月7日
17	方柱	？	？	俊嶽宗願童子	？ ～寛政6年(1794)1月8日
18	笠付方柱	6代正室	伊達紀伊守村信娘・慶	信行院殿靜室宗貞大姉	？ ～享和元年(1801)11月4日
19	笠付方柱	6代次男	依晴	松雲院殿靜嚴宗純大居士	明和4年(1767)1月14日～享和元年(1801)11月24日
20	笠付丸柱	8代生母	鈴木幸右衛門娘・織瀬	量壽院織瀬方	？ ～文政9年(1812)6月13日
21	笠付方柱	8代正室	大久保加賀守忠真妹・園	秋恵院殿端室宗正大姉	？ ～文化12年(1815)9月3日
22	笠付方柱	8代男	忠文	天啓院殿心嚴宗徹大居士	寛政12年(1800)6月2日～文化14年(1817)4月24日
23	笠付方柱	8代9男	嚴	妙相院殿快嚴宗喜童子	文政2年(1819)2月14日～文政4年(1821)10月4日
24	笠付丸柱	8代4女	重姫	信受院殿松嚴妙操大姉	文化6年(1809)5月21日～文政7年(1824)5月21日
25	笠付方柱	8代10男	満彌	慶相院殿應嚴自欣童子	文政8年(1825)3月4日～文政8年(1825)5月29日
26	笠付方柱	8代世子長女	鋪姫	瑤恵院殿芳淑幻秀童女	天保3年(1832)1月7日～天保4年(1833)7月22日
27	五輪塔	8代世子	信經	蒲成院殿韶嚴宗儀大居士	寛政10年(1798)2月6日～天保4年(1833)10月12日
28	笠付方柱	No30の3女	貴子	碧窓院殿淨影宗鏡童女	？ ～天保6年(1835)4月1日
29	五輪塔	7代	信房	仙溪院殿前勢州大守仁道宗壽大居士	明和2年(1765)6月15日～天保6年(1835)5月12日
30	五輪塔	8代次男	信一	栴林院殿檀岸宗海大居士	寛政11年(1799)9月1日～天保8年(1837)11月13日
31	笠付方柱	7代正室	溝口主膳正直娘・よし	寶體院殿金室宗剛大姉	？ ～天保9年(1838)6月10日
32	笠付方柱	8代9女	千代	靈池院殿清蓮智香童女	天保10年(1839)6月18日～天保11年(1840)6月5日
33	五輪塔	8代	信眞	惇徳院殿前左金吾校尉仁峯宗榮大居士	安永7年(1778)2月1日～弘化3年(1846)12月29日
34	笠付方柱	8代世子夫人	松平丹波守光年妹・壽	齡操院殿泰室宗楨大姉	？ ～文久2年(1862)1月念日
35	笠付方柱	9代正室	鶴姫	常行院殿寂室妙照大姉	天保7年(1836)9月13日～元治元年(1864)12月23日